UIFA JAPON NEWSLETTER

No. 117 Dec. 25, 2020

Union Internationale des Femmes Architectes Japon　国際女性建築家会議　日本支部

■主な内容

・みらクル TV　首都防災ウィーク
　みらクル TV 「UIFA　JAPON の活動―コミュニティのレジリエンス（回復力）を後押しして―」を視聴して／ UIFA　JAPON の被災地支援活動―「みらクル TV」の発表を契機に考えたこと／フランス在住の視聴者からの感想
・オンライン講演会「熊本豪雨災害について」
・特集：コロナ禍での会員の日常（２）
　コロナ前コロナ後／社内の力をため込んだ時期／コロナ禍の中の大学から／ 2020 年、温故知新で乗り切ろう
・第 1 回 Web 交流会
　「クルージングとヴァナキュラーな住まい～カリブ海、地中海、カナリア諸島等～」

熊本豪雨後の青井阿蘇神社前の堀の様子　―8 月には蓮の芽が出ていた―佐藤哲熊本県立大学准教授撮影

みらクル TV　首都防災ウィーク　Tokyo Metropolitan Disaster Prevention Week on "MIRAKURU TV"

「首都防災ウィーク」は、2013 年に関東大震災 90 周年を機に、墨田区の横網町公園で始められ、UIFA JAPON は当初よりお抹茶による災害復興を考える茶席を開くことで協力し、中林一樹教授、木谷正道氏などによる実行委員会にも森田美紀会員や稲垣弘子会員が参加してきた。2020 年度はコロナ禍により公園での公開イベントは中止し、「みらクルＴＶ」の一部として９月１日～６日の無観客フォーラム等が配信され、UIFA JAPON は９月２日（水）19：30 から約１時間で、災害復興支援等の取り組みを発表する機会を得た。この番組はその後も Youtube において、一般公開されている（http://miracletv.site/?p=4987）。

ここでは、その発表の報告と、UIFA JAPON の災害復興支援について、松川会員が〈発表を契機に考えたこと〉、フランスから視聴した成瀬弘さんの感想の紹介を２ページにまとめて掲載する。（宮本 伸子）

A Metropolitan Disaster Prevention Week event is held at Yokoamicho Park in Sumida-ku, Tokyo, on Disaster Prevention Day in September.

UIFA JAPON holds a tea party every year, providing a place to discuss disaster prevention with visitors.

In 2020, the event was held online and introduced the activities of UIFA JAPON.（MIYAMOTO Nobuko）

みらクル TV「UIFA JAPON の活動―コミュニティのレジリエンス（回復力）を後押ししてー」を視聴して　清本 多恵子

Restoration Assistance by UIFA JAPON Broadcast on "Mirakuru TV"　KIYOMOTO Taeko

オンラインによる「UIFA JAPON の活動―コミュニティのレジリエンス（回復力）を後押しして―」と題した発表を仙台の自宅にて拝見した。

最初に UIFA JAPON について。1963 年、パリの UIFA 創設に日本から参加し、1993 年には日本支部も結成。

続いて、自然災害被災地・被災者支援について。2004 年、「災害復興見守りチーム」を立上げ、中越地震では、新潟県長岡市小国町法末地区にて活動した。又、各地で「どこでもカフェ」を設け、「女性の建築家」らしいおもてなしを行った。岩手県岩泉町での「だれでもフォトグラファ」の活動は自主撮影会と写真展を継続し、復興記録「明日の岩泉へ」に写真が多数収められた。2016 年に起きた熊本地震では、上益城郡御船町を起点に活動が行われた。更に、2016 年台風 10 号被災の岩泉町、2019 年台風 19 号被災の宮城県丸森町、2020 年熊本豪雨被災の八代市など、各地域に支援を行った。これらについて担当した会員がリレー方式で、各々のパソコンから話す。何度も練習したそうだが、無事滞りなく放映された。

●被災した人々に寄り沿う●現地の人と連携する●被災した人々の自立とコミュニティの再建を支援する、という３点を基本理念として活動してきた「被災地支援活動」だが、「支援というより、交流であった」と、いう言葉が、控えめながらも一貫して、被災者の目線に立ち、継続してきた UIFA JAPON の活動を表しているように感じた。

I watched our support activities on online TV in Sendai. In 2004, we set up the Disaster Reconstruction Support Watch Team for the Niigata Chuetsu Earthquake. In addition, we hosted Dokodemo Cafes in various places and provided hospitality as female architects. The activities of the Everybody's a Photographer initiative in Iwaizumi Town continued with a voluntary photo session and a photo exhibition, and many of the photographs were included in the Iwaizumi reconstruction album Tomorrow's Iwaizumi. After the 2016 Kumamoto-earthquake, we carried out support activities. We also provided support for flood disaster areas.

● Being close to the people affected by the disaster ● Collaborating with local people ● Supporting the independence of the people affected by the disaster and the reconstruction of the communities are the three basic principles of our support activities. I felt that the words, "It was more like an exchange," were modest but consistent, Somehow this box size changed and the text isn't fitting properly now... from the perspective of the victims, and represented the ongoing activities of UIFA JAPON.

UIFA JAPON プレゼンテーション表紙

UIFA JAPON の被災地支援活動―「みらクル TV」の発表を契機に考えたこと　松川 淳子
Reviewing UIFA JAPON's Disaster Area Restoration Assistance through Online Presentations　MATSUKAWA Junko

「首都防災ウイーク」の実行委員を務めている監査役・稲垣さんの指揮で、UIFA JAPON の「被災地支援活動」をオンラインで紹介することになった。分担して原稿を作成し、担当してくれる方を決め、「発表練習」も何回か繰り返し、修正を加えながら、9 月 2 日の「発表」にこぎつけた。UIFA JAPON がチームとして初めて被災地支援に取り組んだ中越地震からすでに 16 年、東日本大震災から約 10 年が経過したいま、私たちの活動を振り返るよい機会にもなった。

発表のなかでも話したことだが、冷静にみると、私たちの活動が、本当に被災地の助けになったのかどうか、心許なく思うこともあり、それが「『支援』というにはおこがましく､むしろ『交流』という方が適切かもしれない」という私の発言になった。「被災者支援」でヒーローを気取るつもりはさらさらないし、皆で一生懸命やってきた活動を卑下したり、後悔したりしているのでもない。建築や都市の創造や研究に関わる団体として、災害をそもそもなくす方法を模索しながらも、これまで創ってきた都市や建築の後始末も見届けようとする私たちだが、もしその途中、道端で倒れている人をみかけた時、そのまま通り過ぎることができるかどうか、という問いは常に目の前にある。放っておけないときにどうするか。自然災害が多発するいま、今後も覚悟を新たに私たちらしい「支援」に取り組みたい。

Sixteen years have passed since UIFA JAPON first offererred support to affected areas. I appreciated this TV show, which gave us a good opportunity to look back on our past activities.

Considering our activities, I sometimes feel insecure about whether they are really helping the affected areas. Those feelings led me to say in my presentation, “It would be appropriate if UIFA JAPON conducts communications with the local residents in the affected areas, instead of providing support for them.” Of course, we do not have any motivation to act as heroines for restoration assistance, nor do I mean to belittle or regret the hard work we have all done.

As an organization of professional women in architecture, urban planning and research fields, we have been exploring ways to eliminate disasters while trying to imagine the future of cities and architecture, which we have been committed ourselves to. However, if we find someone falling down on the way, can we pass by without lifting a finger to help? What should we do if we choose not to abandon someone to this state?

In the midst of frequent natural disasters, we would like to once again brace ourselves to continue our efforts to provide restoration support in our own way.

プレゼンテーション最終ページ
2013 年 岩泉町仮設住宅に住民と集う UIFA 会長と成瀬氏

フランス在住の視聴者からの感想　森田 美紀
Comments from Viewers in France　MORITA Miki

今回、Zoom での発表ということもあって、遥か彼方のフランスから成瀬弘氏（2013 年 UIFA JAPON 設立 20 周年にド・ラ・トゥール UIFA 会長に付き添い来日）が参加し、感想を寄せてくれた（『』内、成瀬さんの言葉）。

成瀬氏はフランス在住で建築家でありながら、ランドスケープアーキテクトのお仕事もされている。

『UIFA JAPON の活動がどんなものか良く分かりました。こういった活動があちこちで起きることはとてもいいことだと思いました。

いま自分の最大の関心は、災害が起きた時に耐えられる土地利用計画、建築をどのように造るかと、災害が起きにくい自然環境の整備をどのようにするかです。テーマが大きすぎてどこから手をつけたらいいのか分かりませんが、一歩でも進められるきっかけを作れたらと思っています』と。

首都防災ウィークの趣旨は「関東大震災を学び、伝え、被害を軽減し、いのちを守る人の輪を拡げる」とあって、毎年東京慰霊堂のある横網町公園で開催されてきた。

私は人々の笑顔が好きだ。平穏な毎日が続くことを願っている。できれば災害は起きて欲しくない。一人ではできないけど、みんなで力を合わせればできることはきっとある。人々の笑顔を取り戻すために。

Because our presentation had to be online, Hiroshi Naruse gave us his comments from France.

Mr. Naruse lives in France and is an architect, but also works as a landscape architect. In 2013, on the 20th anniversary of the establishment of UIFA JAPON, Mr. Naruse accompanied the president of UIFA, Solange d'Herbez de la Tour, to Japan.

Mr. Naruse told us, "I understanded the activities of UIFA JAPON. My biggest interest now is how to make disaster-resistant land-use plans and buildings. This is a method to improve the natural environment that can reduce the risk of disasters.”

The purpose of the Metropolitan Disaster Prevention Week is to "learn from the Great Kanto Earthquake, reduce damage, and expand the circle of people who protect life."

I like people's smiles. I hope that peaceful days will continue. I hope no disasters will occur. We can't do it alone, but we can do it together, to regain people's smiles.

オンライン講演会「熊本豪雨災害について」（熊本県立大学 佐藤哲准教授）に参加して
Lecture on Torrential Rain Disaster in Kumamoto

安武 敦子
YASUTAKE Atsuko

講師：佐藤哲氏（熊本県立大学准教授）
オンライン講演会の様子から（写真：筆者）

2020年8月27日（水）18:00～19:00熊本豪雨災害について現場の様子や復興の経過について佐藤准教授にオンラインで説明いただいた。佐藤先生は横浜国立大学で高齢者介護施設に関する研究で学位を取得後，釧路工業高等専門学校を経て、2015年に熊本県立大学に赴任された。翌年4月に熊本地震が発生し、その際九州を中心とした大学でKASEI（九州建築学生仮設住宅環境改善プロジェクト）*が組織されるなか、中心メンバーとして活動された。自治体との調整、ベンチ等の作成、仮設住宅の記録など縦横無尽に動かれていた。そして再び豪雨である。

今年の豪雨災害は7月4日未明、水害が多い地域であるが、普段穏やかな市長が防災無線で絶叫に近い形で呼びかけ、避難した人も多かったという。河川沿いでは2階の屋根付近まで水没し、国宝の青井阿蘇神社も被災した。前面の堀には瓦礫や車が運ばれていた（1ページ右上写真）。写真の送迎車は650mほど上流から流されたものである。

避難所はコロナ対策も求められ、ダンボールによる仕切りやベッドはかなり準備され、コロナ前の半分程度の密度で運営されていたという。しかしコロナ感染者が出、熊本県はボランティアを県内のみに限定し、ドロかき等復旧には時間がかかった。今回私が暮らす長崎県でも各地で冠水したが、長崎大学の当初の方針はボランティアの禁止であった。副学長らに交渉し、地元学生が地元のみという限定でボランティア活動が認められたが、人手が必要なときに支援できないもどかしさを感じた。

熊本のボランティアセンターは7月10日に開設、並行して民間のボランティアセンターが機動力高く動いている。熊本豪雨災害後、一旦解散していたKASEIは再結集しミーティングを重ねているが、ボランティアの制限や大学の移動制限とで、オンラインによる支援やリレー型支援（熊本県内の大学へ支援品を搬入し、そこから仮設住宅に輸送する）を模索している。ここでも情報収集のキーマンは佐藤先生だ。

現在仮設住宅がムービングハウスを筆頭に徐々にでき始めており、球磨村で269戸、人吉市で265戸、八代市で40戸と続く。ムービングハウスを除いて全て木造，屋根は雨音を配慮して瓦葺きの予定である。10月の現地の様子を聞くと、復旧と言い難い家がかなり残っているとのこと。引き続きUIFAの方々にも支援をお願いしたい。

＊KASEIは、九州･山口の大学の研究室を単位としたチームで、各仮設住宅の支援活動を居住者と協力しながら実施し、その経験や情報を整理・共有しながらKASEIプロジェクトに蓄積、他の仮設団地での支援プロジェクトで展開するもの

Regarding the 2020 torrential rains in Kumamoto,Associate Professor Satoshi Sato of the Prefectural University of Kumamoto reported online about the situation at the site and the progress of reconstruction. The event created a linear rain zone before dawn on July 4, and rain continued in Hitoyoshi City and Kuma Village, flooding many areas.

Evacuation shelters were set up in gymnasiums, and elsewhere, and COVID-19 measures were taken. The local government prepared a considerable number of partitions and beds with cardboard boxes, and operated them at a density about half that of normal times. However, there was one COVID-19-infected person. Kumamoto Prefecture limited volunteers to people in the prefecture. The resulting labor shortage has delayed recovery. Student volunteers were also restricted to those at Nagasaki University. I felt frustrated that COVID-19 hindered helping those in need.

The volunteer center in Kumamoto was opened on July 10, and at the same time, private volunteer centers began working with high mobility. Associate Professor Sato was asked for help in the previous connection and joined the effort. Then, KASEI, a student support group to which he belonged, reunited and began searching for a support method under COVID-19, with him in charge.

Currently, temporary housing is gradually being built, and about 800 units are scheduled. Some moving houses were introduced, and others will be wooden with tiles roofs in consideration of the sound of rain. It is still in the middle of reconstruction. I would like to ask for your continued support.

人吉市の避難所の様子／滞在時間の短縮化が課題（写真：佐藤哲）

短時間で設営されたムービングハウスによる仮設住宅／今後、住居環境の検証が続く（写真：佐藤哲）

コロナ禍中における会員の新たな日常（その２）
UIFA JAPON Members' Lives During COVID-19（Part2）

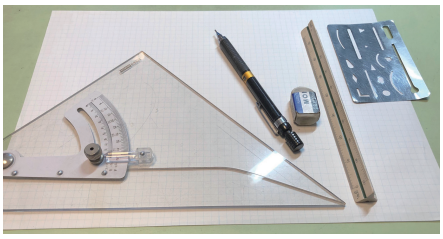
116 号（その１）では、リード文含め 12 人の方が書いた。今回 117 号は、個人事務所（＋年金）、設計・施工事務所、大学教員、ゼネコン勤務など 4 人に寄稿いただいた。さすがに UIFA メンバーは、暮らしや仕事も工夫し、コロナ渦を乗り切るエネルギーは頼もしい。しかし、今、私は、社会の脆弱性を危惧している。安心していいのか。課題があれば皆で考えていきたい。（渡邉 喜代美）

Twelve members wrote stories for newsletter No. 116（No.1), including the lead story. This time, four people contributed to No. 117, including a private office (+ pension), a design/construction office, a university teacher, and a general contractor. As expected, UIFA members have their lives and work, and need the energy to survive COVID-19. But now I am concerned about the vulnerability of society. Can we be relieved? If there are any issues, we would like to think about them together.（WATANABE Kiyomi）

コロナ前コロナ後　薄井 温子
Before and After the Pandemic　USUI Haruko

コロナ以前から自宅にいることが多かった。かつて木造住宅設計に関わり先輩の手伝いなどしていたが、時間がかかる割には収入が少ない。事務所費などを減らすため 10 年前、仕事場を渋谷より調布の自宅に移していた。協同組合で歴史的建造物の調査にも関わっていたが、こちらは専用の事務所がある。まだ信頼できる家具や建具の職人がいた頃は、特注品をつくるなど面白かった。だが彼らは高齢で廃業してしまった。昨年 95 才の母が大腿骨を折り留守番が出来なくなった。私は家にいることが多くなり、打合せなどで出かけるのは母のデイケア中、旅行時はショートスティに預ける。骨折前、介護施設を拒否していた母だが、無愛想な娘よりも施設の方が親切で楽しいようだ。自粛中、先輩から仕事がなくなり困っている、どうしている？と電話が来た。今年から少し年金がでるので仕事は辞め好きな事でもやろうかと答えると、年金だけでは暮らしていけないよと笑われてしまった。

I used to stay at home before pandemic. Ten years ago, I moved my workplace from Shibuya to my home in Chofu to reduce office expenses. I investigated historic buildings in a cooperative team, but we have our own office. Last year, my 95-year-old mother broke her femur. I often stay at home, so I go out for meetings while she is at the day-care house and travel when is in short-term care. She refused these before she had the fracture, but she seems to enjoy it there. A senior colleague called and asked, "What're you doing? I lost my job due to COVID-19." I said I would retire. He laughed because the pension is too small.



絶滅器具類、じっと手をみる

社内の力をため込んだ時期　池田 園子
The Time for Developing new Strengths In-house　IKEDA Sonoko

私は主人と小さな工務店を経営しています。保育園の営繕・改修工事、木造耐震補強工事、高齢者・障がい者の住宅改修が主な工事です。

さて、２月に新型コロナウイルスという言葉が聞かれるようになり、東京オリンピックが延期決定、緊急事態宣言と、どんどん不安なニュースが続く中、私の工務店は保育園・高齢者がお客様という事もあり、決まっていた工事の延期の連絡が続き、社員一同時間を持て余す日が多くなりました。

そこで、コロナ禍だからこそできることは何か？を考え、対面しないでできる営業活動、社内環境の改善、勉強会の開催等に取り組むことにしました。

その一つ、勉強会は、設計と工務、お互いの知識を伝え合うことで社員一人一人の能力を上げるのが目的で、耐震、福祉住環境、保育園をテーマに全部で９回ほど行われ、今後も定期的に開催したいとの声が上がっています。

売り上げは大幅に落ちましたが、コロナ禍はゆっくり、社員の力をためる時期だったと思います。３月に延期となった保育園の工事もようやく 10 月に着工することができます。今後はこの半年間に貯め込んだ力を発揮していきたいと思います。

I run a construction company with my husband.

The main work is nursery school registration and renovation, earthquake-resistant reinforcement for wooden houses, and housing renovation for older people and those with disabilities. Our customers are a nursery school and older persons, so the postponement of construction that was decided increased in March due to COVID-19.

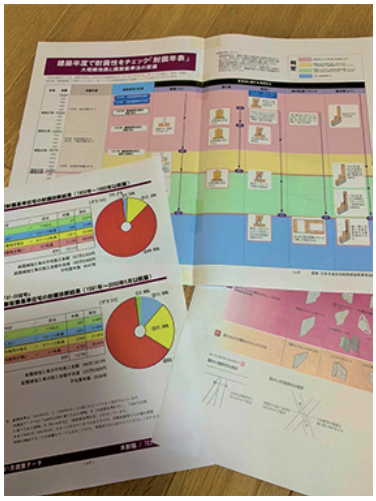
Under the declaration of the state of emergency, it was a period for carrying out what we can do now.

Study sessions were held 9 times on the themes of earthquake-resistant reinforcement for wooden houses, housing renovation for older people, and the nursery school.

It was a very good time to share each other's knowledge.

Sales have fallen sharply, but I think it was time to build up the ability of our employees.

I will be able to demonstrate the power I have accumulated over the last six months.



耐震勉強会資料「耐震年表その他」
日本木造住宅耐震補強事業者協同組合（木耐協）
耐震年度別にみる耐震性に関するデータ発表より
(2019.1)
https://www.mokutaikyo.com/about/data/

コロナ禍の中の大学から　神村 真由美
COVID-19 Impact on College Classes　KAMIMURA Mayumi

設計実技授業を含めて全面的にオンライン授業になった大学では、オンライン受講環境が整わない学生への配慮もしながらの授業準備と運営に忙殺された前期だった。実技演習授業では学生の習熟度を危惧していたが、学期終わりには意外にも、建築やインテリアなどの学生全体の作品完成レベルは向上した結果となった。要因は個々の学生への細かなエスキース指導の内容がオンラインにより全履修生の目前の PC 画面で共有されることによる集団学習効果と、ネットでしか教員や仲間と繋がれなかった学生達が少ない情報の中で自身の製作内容に、孤独の中で邁進した結果かと思われる。この成果は今後の授業運営への一筋の光になると感じる。

後期が始まり、大学との交渉を経て卒業制作などのごく一部の授業のみだが、事前入構申請、来校時の入念な健康チェック（サーモカメラ、2 週間分の健康資料提示）や消毒の徹底を条件に学生の入構を認め始めており、教員が分担で学生の入退状況をチェックする日々になっている。

通常のようなオープンキャンパスができない状況での学生募集の試行錯誤もあり、一歩一歩手探りで進む長い戦いはまだ続く。

The first semester at the university was occupied with classroom management, including preparation for students without access to an online class environment. I was concerned about the level of student proficiency, however, by the end of the semester, the overall level of students' work in design had improved.

I suppose the reason for this is due to the group learning effect, with the condition enabling every student to see others' works through online presentations, and also because they were able to concentrate on their creation in solitude with limited information. These results will have a positive impact on future classroom management.

After negotiations with the university, in the second semester, only a few classes, including graduation projects, allowed students to enter campus, but only after a temperature check, two weeks' worth of health documents and thorough sanitation. We must continually handle this never-before-experienced situation.

学生たちが制作に励む明かりが灯る駒沢女子大学住生活館夜景（遠景に富士山のシルエット）

2020 年、温故知新で乗り切ろう　阿久井 由美
Learning from the Old and Recognizing the New as the World Changes　AKUI Yumi

世界中に社会の変化を与えた COVID-19。2020 年 2 月、富士山や東京都心を望む東京郊外の大きな公立病院のラウンジの TV で横浜港の客船に感染発生の報道を対岸の火事のように聴きました。それが一転、東京の公立病院が上陸患者受入の報道翌日に病院の警備が一変。廊下の備品や売店のアルコールが視界から消え、ECMO のある救急入口から離れた正面玄関では来館者が整然と行列。日本では初めての感染パンデミックに、市民にも登校・営業の制限やテレワークなど予期せぬ事態を次々迫られ、黙々と過ごす日々が始まりました。

同月末、解体予定だった隣地の旧棟が改修工事に変わりました。病棟の壊体前にコロナ専用病棟へ変更すると報道で知り、少し驚きました。

現代の耐震や改修技術の進歩で前より再生が容易になりました。が、長い戦後の期間、解体新設の繰り返しに慣れた日本では公共財の急な変更や再利用は珍しく、非常時に社会資源として再活用の実現に、ホっとしました。

私個人はコロナ後も一歩立ち止まって考える社会であってほしい。日本建築の伝統は可変・組替え・再利用と思います。先ずは壊さず熟考し、社会資源として使える側面を分析してみる。維持と新設と地価の財務を中長期に比較し、時には文化的な価値を判断し、環境保全にも繋げる。決定事項でも利用価値を再確認し、時に臨機応変に計画を組み直す。そんな古くて新しい次の時代の様式を予感した年でした。

COVID-19 has changed societies around the world. The first wave of infections in Japan forced citizens to face unexpected situations such as school restrictions, business restrictions, and teleworking, and the days of quiet living began. I learned from the media that an old building on adjacent land, which was scheduled to be demolished, would be renovated and rebuilt into the Coronavirus Ward of a large public hospital near Tokyo. I was relieved they were able to reuse the existing building as a social resource in an emergency.

The architectural tradition in japan is change, refurbishment, reuse and restore. First, we should examine without dismantling and analyze the aspects that can be used as social resources. Comparing medium- to long-term maintenance needs, new construction, land pricing and cultural value will lead to environmental conser- vation. We should reaffirm the value and at times, reorganize plans. It was a year that foretold the style of the next era, old and new.

都心遠望の夜明けと日の出

No. 117 Dec. 25, 2020

Union Internationale des Femmes Architectes Japon

UIFA JAPON 事務局
〒 102-0083
東京都千代田区麹町 2-5-4
第 2 押田ビル ㈱生活構造研究所内
Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866
E-mail: uifa@liql.co.jp
URL: http://uifa-japon.com
発行 2020 年 12 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON
c/o LABORATORY FOR INNOVATORS
OF QUARITY OF LIFE
DAINI-OSHIDA BLDG.
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861
FAX :+81-3-5275-7866
URL :http://uifa-japon.com

第 1 回 Web 交流会 2020 年 11 月 4 日 1st Web Exchange Meeting

「クルージングとヴァナキュラーな住まい～カリブ海、地中海、カナリア諸島等～」 稲垣 弘子
Cruising and Vernacular Houses in the Caribbean, Mediterranean and Canary Islands INAGAKI Hiroko

第 1 回目は気軽に楽しめる会で、後が続くように、楽しい話をとの要望で、今回は旅好きの私が、訪れた街やその土地固有の人々の暮らしをご紹介することになりました。

昨今は、夜に運航する船で移動時間の節約になり、毎日パッキングしないで済むクルージングに出かけています。

1997 年 3 月のカリブ海クルーズに始まり、地中海、エーゲ海アドリア海、ペルシャ湾、2019 年 1 月にカナリア諸島を廻りました。日本近郊では横浜発着のダイアモンドプリンセス号で北海道とサハリンスク、日本の四大祭りと釜山、済州島クルーズに参加しました。カナリア諸島クルーズ（ノルウェージャン・スピリット号）ではノロウイルスが発生し、ビュッフェレストランでは料理カウンター前 1 m位のところに仕切りベルトが張りめぐらされ、ウエイターが料理をお皿に載せてくれるなど、衛生管理が徹底されるようになりました。乗客乗員合わせて 3000 人近く乗船しているので、ノロウイルスが蔓延することになったら大変です。大過に至らず無事下船することが出来ました。

旅行はともすると、観光名所めぐりになるのですが、その土地固有の住居、ヴァナキュラーな住まいに興味があり、住み続けられている一般の住居を見学させて頂いています。特に印象に残った水上生活者の住居や移動式住居、城壁住居についてふれました。

Web 交流会には久しぶりの方や遠方の方も加わり 25 名参加。ご自分が旅した時の印象やもう一度旅してみたい所の話、毎日変わるホテルを見るのも旅の楽しみの一つ等々。はたまた、添乗員に自由時間に希望の所に案内してもらう交渉術等、お酒やお茶を片手に話題は尽きず、いつの間にか時間が過ぎてしまいました。

プレゼンテーション表紙／地中海クルーズで乗船したコスタパシフィカ号

カンボジアのトンレサップ湖では竹を束ねて床を造る 水上家庭菜園（左）座って炊事（右）電気が引かれていないため、蓄電池を利用。

トイ・トレインに飛び乗って（インド ダージリン）

■役員会報告

2020 年度第 3 回 9 月 7 日 オンライン会議 8/27 初のオンライン講演会（外部の講師招聘・外部の方も参加可能）報告 首都防災ウィークの UIFA JAPON の復興支援活報告について ネットバンキング利用検討 NL117 号企画報告

2020 年度第 4 回 11 月 12 日オンライン会議 11/4 初の Web 交流会（会員対象）報告 助成金申請不採用 会費未納について 熊本県八代市へのお見舞金検討 ド・ラ・トゥール UIFA 会長以後の UIFA について議論を始める NL117 号編集会議報告

■編集後記

コロナ第 3 波、津波にならないように（薄井）／リアルに会話出来ることが益々宝物になってきた（井出）／師が走る コロナも走る 師走かな（宮本）／第 3 波で感染者増加中、3 度目の旅行企画も中止濃厚で仕事意欲減少中 (杉原) ／テクノロジーに溺れることなくテクノロジーを使いこなし傘寿を超える 2021 ウイルスを蹴落としたい！（渡邉）／外から生き方の変革を迫られる、進化しないと立っていられない（御船）／コロナで休みの日は地域内での活動の比重が増えた（編集長 牛山）